

対照談話論からみた日韓の省略

沖 裕 子

要 旨

会話相手の手許にあるものを見て、「コーヒー？」などと名詞止で質問する表現は日本語では自然だが、韓国語では使用しにくいことが指摘されている。同じ会話場面で、日本語ではなぜ名詞止が可能で、韓国語では述語が必要なのか、説明を試みた。まず、省略には、イーミックなレベルでの省略と、エティックなレベルでの省略があることを整理した。「コーヒー？」の例は、イーミックなレベルでは述語が省略された名詞1語文として定位されるが、具体的な場面における表現の適切性を判断するエティックなレベルでは、日本語では省略ではなくこの場面の無標の表現の一つとして定位される。そのうえで、日韓の同じ場面で名詞止の適否判断が異なる理由を、日本語と韓国語の談話構築態度の差から分析考察した。日本語は、話し手と聞き手がコーヒーを見る視線を重ね合わせる談話構築態度（三項関係）をとるため、述語がなくても状況復元が容易である。韓国語は、三項関係をとらず自他向かい合いの関係に立ちコーヒーを共同注視しないため、動きや状態を言語で描写する述語が必要となり、名詞止が使用できないと説明した。

キーワード：省略 談話構築態度 対照談話論 日本語 韓国語

1. はじめに

ことばの省略を考察するとは、1) 省かれる表現の性質を考えるとともに、省略されずに残る表現の性質を考えることでもある。また、2) なぜその省略が可能なのかについても、説明できるようにすることが重要である。

1) の問に答えるには、その表現に、そもそも、省略があるのかどうかを考えなければならない。また、2) の問については、表現のくみだてがこのように行われているから、この部分が省略可能になる、という発想で考えてみる必要があると思われる。先行研究では概ね省略が可能理由は、話し手と聞き手の双方に分かっていることは省略されうる、という説明にとどまっているように思われる。これについて、もう一歩踏み込んで考えようとしたのが本論である。

対照研究では、1 言語だけでは見えなかったものが見えてくることがある。日本語と韓国語はともに膠着語であり、文法の基本的な構造については他の言語に比して似ているといってもよいが、よく観察すると興味深い異なりが見いだされる。特定場面で名詞止が使用できる日本語と、使用できない韓国語の事例を本論後半の主たる対象にして、ここでは、次のことを述べていく。

第1に、省略には、イーミックなレベルでの省略とエティックなレベルでの省略の、2種類があることを主張する。

第2に、日韓の談話レベルでの省略の差異を産む一因のひとつとして、談話構築態度の違いが影響していることを述べる。談話構築態度とは、話し手と聞き手の関係性の立て方ともその見方のことで、母語話者が無意識のうちに共有している談話産出時の構えを言う。これは、社会文化とも関係しつつ、談話単位における内容と表現のくみたてを左右するもの見方（発想）の基盤となる¹⁾もので、話者の無意識の態度として存在し、談話論における記述対象となるものである。

2. 省略とはなにか

2.1 省略の2種

省略には、イーミックなレベルでの省略と、エティックなレベルでの省略の、2種があると考えられる。具体例を適宜若干ずつ挙げて説明していきたい。

2.2 イーミックなレベルでの省略

イーミックなレベルでの省略とは、自律的体系内の言語規則が関わる省略である。この場合、省略部分と省略条件を記述していくことが課題となる。次に具体例をいくつか挙げて、説明していきたい。

(1) ウナギ文におけるダの代用説にみる省略

- 1) ほくは、うなぎだ。
- 2) ほくは、うなぎを注文する。
- 3) ほくが注文するのは、うなぎだ。

「ほくが注文するのは、うなぎだ。」という分裂文³⁾の解釈に対して、1)と2)を関係づけた説明を行うのが述語代用説である。述語代用説に立つと、「注文する」を「だ」が代用するという考え方になるが、結果的に「注文する」が言語としては表現されないことにつながり、省略の観点から説明する必要が出てくる。

(2) 文接続における照応の代用説にみる省略

- A: 明日は、休講だ。
B: だよね。

会話において、Bの発話の「だ」が、直前のAの文「明日は、休講だ」を受けていると解釈すると、(1)の代用説と同様、省略という観点に関係してくる。

(3) 接続詞を用いた文接続にみる省略

- 1) 対比的逆接

- ① 和菓子は好きだ。しかし、洋菓子は嫌いだ。
 - ② {和菓子：好きだ} しかし {洋菓子：嫌いだ}
- 2) 推論的逆接
- ① 事故にあった。しかし、怪我はなかった。
 - ② 事故にあった。(ふつうは怪我をする) しかし、怪我はなかった。
 - ③ {怪我：する} しかし {怪我：しない}

逆接には、対比的逆接、推論的逆接、前件評価逆接の3種がある(沖1995、1998、2006)。

1) の対比的逆接では、「しかし」が結ぶ反対関係にある前件と後件が言語に表現されている。それに対して、推論的逆接では、「しかし」が結ぶ反対関係にある前件が言語的には、常に表現されない(坂原1985)。推論的逆接では、「しかし」の前件が、言語構造として、常に省略されるのである。前件が省かれても②全体の意味が通じるのは、「しかし」が前件と後件を反対の関係で結ぶ語詞であるため、話し手の推論によって省略部分を自動的に復元するからだと考えられる(沖1995)。

(4) 応答の文接続にみる省略

- 1) A：今日は、バスで来ましたか？
B：はい、バスで来ました。
- 2) A：今朝は、朝ご飯を食べましたか？
B：はい、食べました。

『日本語学大辞典』に挙げられた例である²⁾。1) では、「バスで」という格成分は省略されないが、2) では、「朝ご飯を」という格成分は省略されている。応答の文接続における格成分の省略に関して、規則性があることを示している。

(5) 依頼、勧誘、意志、命令形を用いた文における第2人称の省略

- 1) 依頼文
 - ① イッショニ イッテ。(私と)一緒に行って。
 - ② アナタガ イッショニ イッテ。(あなたが、(私と/子供と)一緒に行って。)
 - ③ アナタモ イッショニ イッテ。(あなたも、(私と/子供と)一緒に行って。)
- 2) 勧誘文
 - ① イッショニ イコー。(私(たち)と/私たちも皆と)一緒に行こう。)
 - ② *アナタガ イッショニ イコー。
 - ③ アナタモ イッショニ イコー。(あなたも、(私(たち)と)一緒に行こう。)

依頼文は、目の前の相手に頼む場合、①が無標の文である。②は、「あなたが、私と(あるいは「子供と」など第三者の解釈も可能)、一緒に行って」というような場合に使用される。この場合、「あなた」は他の誰かと対比的に表現されており、①とは文意において別義である。③は、「あなたも」という別の成分を付加した場合であり、①とは別義になる。

勧誘文は、目の前の相手を誘うものであるが、①が無標の文である³⁾。これに「あなたが」を加えた②は、非文になる。この点は、「あなたが」を加えても、少なくとも非文にはならない依頼文とは異なっている。③は、前述同様、別義である。

2.3 エティックなレベルでの省略

エティックなレベルでの省略とは、言語使用における特定場面の発話の適切性が関わっている。使用場面と使用言語表現との関係を問題とするため、使用場面が変われば、その表現が不適切になる場合も含めて観察される。言語として自律的な文そのものの問題ではなく、使用における傾向性が問題となる。以下、具体例を挙げながら説明していきたい。

(6) 対照言語学的観察における省略

- 1) テオ アゲテ。(手をあげて。)
- 2) アナタノ テオ アゲテ。(あなたの手をあげて。)
- 3) Raise your hand.

『日本語学大辞典』の「省略」の項目には、「(*あなたの)手をあげて/Raise your hand」の例が挙げられている。1)と3)が比較対照されて、日本語には「あなたの」が省略されていると感じられる場合である。しかしながら、たんに相手に手をあげてほしいことを伝える場面では、1)こそが、日本語では無標の発話である。もし、同じ場面で2)を発話すれば、「私の手ではなく、あなたの手を」などの対比の意味が生じ、文意は別義となって、エティックな談話としては、かえって2)が不適切である。使用場面と関係づけた発話の適切性を問題にする限り、1)には、省略がないと考えなければならない(次の(7)も同様)。このとき、文レベルでみると格成分のすべてが表現されているわけではないため、そこに省略が感じられる。加えて、他言語と対照させたときにもそこに省略が感じられるのであろう。

(7) 探し物をしていてみつけたような場合における、もっとも自然な表現

- 1) ア、アッタ。(あ、あった。)
- 2) ア、テブクロガ アッタ。(あ、手袋があった。)
- 3) ?ア、サガシモノガ アッタ。(?あ、探し物があった。)

この場面でもっとも自然で無標な表現は、1)である。最初から手袋を探していた場合には、2)は言えない。2)は、眼鏡を探していて、たまたま失くした手袋を見つけたような場合の表現であって、1)とは、別義になる。また、この場面では、3)も不適切である。探していたものを見つけたその瞬間には、ガ格成分は表現されないことが自然である。つまりは、エティックな談話レベルで観察したときには、1)は、省略された表現ではなく、これがこの場面における適切な発話である。

定延(2011, 2015)は、状況と結びついた発話の適切性、あるいはもっと積極的に発話資格の有無についても論じている。発想は異なるが、考え方は本論と共通するところがある。

(8) 会話場面における物語文

A：あのね、新潟まで、お父さんと一緒に遊びに行ったんだ。

トンネルを抜けて、湯沢に出たら、すごい雪なんだ。2メートルぐらい。

B：ふうん。車？ 新幹線？

イーミックなレベルで「主語」という考え方をすると、「トンネルを抜けて、湯沢に出たら、」という従属節（副詞節）の主語と、「すごい雪なんだ」という主節の主語は異なっている。従属節の主語は「私が」であろうし、主節「すごい雪なんだ」の主語は「その場所が」等であろう。イーミックな文レベルで省略を復元すると、「トンネルを抜けて、湯沢に出たら、すごい雪なんだ」には、こうした主語の省略がみられることになる。

しかし、談話表現の観点からみると、下線部は次のように解釈できる。「乗り物に乗った私（移動している乗り物のなかにいる私）」が「トンネルを抜けて、湯沢に出たら」、「乗り物に乗った私（移動している乗り物のなかにいる私）」がそこで見たものは「すごい雪なんだ」とでもいうべき解釈である（「すごい雪なんだ」には省略はなく、この場面の発話としては過不足がない）。この理解が日本語において決して不自然ではないことは、直後の話者Bの「車？新幹線？」が自然なことからも分かる。「車？新幹線？」とは、「あなたが乗っていた乗り物は車か？それとも新幹線か？」という疑問を表現したものである。「乗り物に乗った私（移動している乗り物のなかにいる私）」という省略されている部分が的確に解釈されていないと、下線部の直後の自然な質問としては出てこない表現だと考えられる。こうした文解釈は、イーミックな文レベルの格構造を考えているだけでは引き出せない。

下線部は、主観的把握で表現された文である。そこに留意し、談話の構え、あるいは、産出される日本語文のくみだて原理そのものが、屈折語である印欧語系の言語とは基本的に異なる⁴⁾ことに記述の光を当てる必要がある（趙2016）。

主観的把握とは認知言語学が明らかにしたもので、話し手そのものは言語化されず、話し手の視野に見えるものを描写していく表現法である。主観的把握文には、省略が多い。そのため、相互行為として談話をみると、話し手の主観的把握文を受容するためには、聞き手の補完的理解が不可欠になってくる。日本語には主観的把握文が頻出することが指摘されており、こうした現象を指して、池上（2000、2007）では「聞き手責任言語」、沖（2013）では「指標型言語」と呼んでいる。ちなみに、話し手の主観的把握を聞き手が補完的に理解しなければ談話は完結しないが、それがなぜ可能なのかを談話論的に説明する必要が出てくるであろう。ここでは、日本語の談話構築態度がかかわっていると考えていることを、後に述べる。

(9) 電話でのやりとりで、今、月食が見えるかどうかを尋ね合う場面

A：見える？

B：見えるよ。

これらは、ともに、主観的把握文だといえる。月を見ながら、月食を話題にしていることが話し手Aと聞き手Bの両者に理解されているため、対象となるものが表現されていない。エティックなレベルでは、「月が」は言語化される必要がないので、この場合における(9)は、

省略がないと考えなければならない。

(10) 二人で会話しているとき、相手の手許にあるものを見ながらの発話

A：かまぼこの新作？

日本語では自然な表現であるが、韓国語ではこうした名詞止文は、この場面では使用しにくいとされている（生越2018）。「かまぼこの新作？」は、日本語文としてみたときに両義性があり、「新作」に意味の焦点がある「（かまぼこの）新作？」という意味と、「かまぼこ」に意味の焦点がある「かまぼこ（の新作）？」という意味のどちらでもよい⁵⁾。「かまぼこの新作？」は、主観的把握によって産出された表現である。主観的把握文には、多くの省略とともに、こうした両義性がみられる。

省略は、それが可能になる談話的しくみを記述する必要があると前述した。すなわち、省略や両義性があっても会話が可能なのはなぜか、という観点から日本語をとらえなおすことが必要だと考えるものである。そのひとつの分析として、「談話構築態度」の日韓差をあげ、次に詳しく述べていきたい。

3. 「かまぼこの新作？」の成立理由解明のための対照談話論

前節でみた「かまぼこの新作？」は、主観的把握文である。また、そこにみられる省略はイーミックな文レベルの省略として位置づけられる。何が省略されているのか、そして、そうした表現がエティックな談話レベルでなぜ成立するのか、その談話的しくみについてここからは述べていく。特にその理由を、日韓の談話構築態度の異同という対照談話論的観点から、説明を試みるものである。

生越（2018：237）は、「日本語では、(11)のように、主題を省略した名詞止め文をいきなり使うことがあるが、韓国語ではそういう例があまり見られない。つまり、韓国語で(12)のような名詞止め文を使うには、[論者補遺：質問文の答えであるというような]明確な前提が必要なのかもしれない。」とし、次の用例を挙げている。

(11) （かまぼこを見ながら）かまぼこの新作？

(12) “kukey nwuku-nya?” “lasupaykasu hotayl saepka?”（「それ誰？」「ラスベガスのホテル事業家」）

用例(12)は、「それ誰？」という質問の答えであることが明白であるので、「ラスベガスのホテル事業家」という名詞止文で答えられるが、(11)のように、相手の手許を見ながらの場合には韓国語では名詞止文が使用できないとされている。

この事実の指摘は、沖・姜・趙（2019）でも支持される（以下の韓国語内省資料は、姜錫祐による）。たとえば、話し手が部屋に入ってきて、コーヒーを飲んでいる相手に発する文としては、次の(13)のような名詞止文は使用できない⁶⁾。韓国語では、少なくとも(14)(15)(16)(17)のように、述語を必要とするのである。(14)から(17)の韓国語は、自分もコーヒーを飲みたい場合

の声がけとして自然な表現である。

- (13) # 커피? (コーヒー?) [#は、この文脈では、談話的に不自然なことを示す]
 (14) ○ 커피야? (コーヒーなの?)
 (15) ○ 커피 마셔? (コーヒー飲んでるの?)
 (16) ○ 커피 맛있어 보인다. (コーヒーおいしそうにみえる)
 (17) ○ 커피 맛있겠다. (コーヒーおいしそうだ)

ちなみに、日本語談話では、自分も欲しくて「コーヒーおいしそうだ」と発話すれば、少々押しつけがましい感じが表示れる。「おいしそうだね」などのように「コーヒー」を省略した言い方や、「コーヒー?」という名詞一語文を使用するほうが自然である。また、日本語談話では、「コーヒーなの?」「コーヒー飲んでるの?」は、確認したい場合の発話になるが、部屋に入ってくるなり相手の飲み物の中身や行為を確認する言語行動自体が問題となるため、これらの日本語談話には違和感が生じる。

4. 談話の同時結節モデル

日韓で「新作のかまぼこ?」という名詞止文の自然さが異なることは、先にも述べたようにエティックなレベルでの問題として位置づけられる。エティックなレベルで考察するには、その前提として、具体的な単位としての談話をどのようなものと考えるか、基本的なモデル（言語観）が必要になる。

談話は言語的に閉じた単位ではなく、会話においては、場面や履歴の情報とともに、相手や自分の言語文脈も資源として取り込みながら展開していく（沖2006）。すべてを、二次元的なモデルに書き写すことはできないが、その部分を示してみれば、図1のような同時結節モデルを立てることができる。

社会文化、意識態度、談話内容、談話表現の4層が、時間的に同時に結節していくと考えるのが、図1のモデル（沖2010）である。

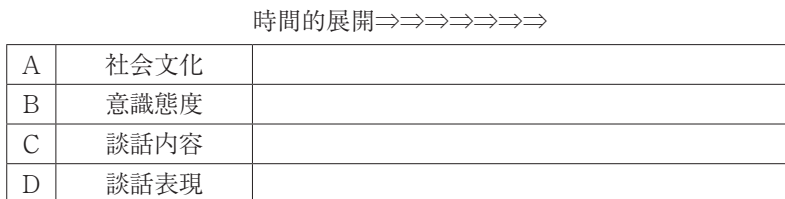


図1 談話の同時結節モデル（部分）

談話展開の異なりは、これらA層からD層までのすべてが関係しあっていると思われる。ここでは、様々な要因のなかから、何を（C層：談話内容）、どのように述べていくか（D層：談話表現）という違いを支えている、談話構築態度について、分析考察の焦点をしぼって述べていく。談話構築態度は、「B層：意識態度」に属する問題である。

沖・姜（2018）、沖・姜・趙（2019）を引用整理しながら、日韓の談話構築態度について説明していきたい。

5. 日本語と韓国語の談話構築態度モデル

5.1 「梅の木談話」のある日本語とない韓国語

沖・姜（2018）では、「梅の木談話」が、日本語のみであって韓国語では違和感を抱かれるという指摘（渡辺・鈴木1981の指摘）に注目した。次の(18)は、沖・姜（2018）が「梅の木談話」と名付けた談話展開である。

(18) 韓国語人からみる日本語人：渡辺・鈴木（1981：171-172）より

甲「もう梅の花が咲いていますね」

乙「ええ、紅梅です。おとし近所の方からいただきましたね……」

甲「色がとてもきれいですね」

乙「もう一本裏にもありますがね」

(18)に引用した「梅の木談話」の特徴は、話し手と聞き手が、お互いに、季節や自然に向かい合い、それ（のみ）を話題の中心として展開していくことにある。

こうした「梅の木談話」が日本語では自然な談話展開であり、ごくありふれているのに対して、韓国語ではそうした談話展開は違和感をもたれ、口にされない⁷⁾ということの差に、沖・姜（2018）は注目した。そして、それがなぜであるかを説明しようとして得たのが、談話構築態度というモデルである。

5.2 日本語の談話構築態度モデル

沖・姜（2018）は、日韓談話のこうした異同を通じて、それを説明する談話モデルを、次のように求めた。まず、時枝（1941）に代表される「場面意識」の問題が、日本語を言語行動の面から説明するのに常に言及されてきたことから、日本語の談話構築態度には、聞き手を含んだ場面の問題が関与していることに言及した。次に、話し手と聞き手の構えを説明するモデルとして、浜田（1995、1999）が主張した「三項関係」に「場面意識」を加えたモデルが有効であることを述べた。「三項関係モデル」は、心理言語学において、幼児の言語獲得における普遍的（ユニバーサル）なモデルとして提唱されたものであるが、韓国語談話と対照させると、むしろ日本語の談話構築態度の個別性の説明に有効な概念であると考えたのである。

図2のAは、母親と子どもがお互いに向かいあっている図。Bは、母親がものを見ているのを見ている子どもの図。Cは、母親と子どもが、ひとつのものを見ている図。Dは、母親と子どもが同じものを見ているが、壁があるため、お互いが同じものを「ともに見ている」ことにはならない図である。このことから、浜田（1995）は、母親と子どもが、「ともに見ている」ことの重要性を説き、図Fを提示した。すなわち、図Fのように、母親も子どもも、ともに同じものを見ているが、母親は、子どもがものを見ている様子も見ているこ

と、それが、「ともに見ている」ことの重要な点だとしたのである。図Eでは、母親だけではなく、子どものほうも、母親がものを見ている様子をも含めて見ていることが分かる。つまりは、母親のものへの視線や接し方を見ることによって、子どもは、ものの見方や接し方(すなわち浜田のいう意味)を獲得していくとしたのである。

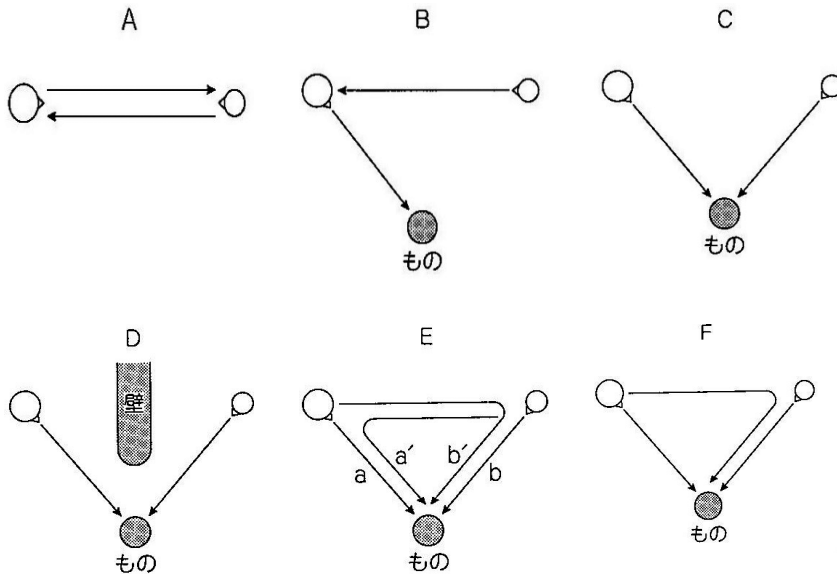


図2 浜田(1995)が提唱した子どもの言語獲得に関するモデル

5.3 日韓の談話構築モデルの異同

沖・姜(2018)は、浜田(1995)の「三項関係モデル」が「梅の木談話」をよく説明する仮説であることに気づいた。換言すれば、韓国語談話では、「三項関係モデル」が有効に機能しないことでもある。そこから出発し、次のようなモデルを得ている。

すなわち、日本語談話では、話し手、聞き手、対象、および、場に対する意識の4点が重要であること、また、話し手と聞き手は、対象をともに見ている三項関係を構築しつつ、場面全体を見ていることがモデル化された。場面を見るときは、自分自身、聞き手、対象が場のなかでどう位置づけられるかを見ていることであるとともに、聞き手が自分をどうみているか、対象が自分をどう見ているか(対象から見ると自分はどう見えるか)をも、見ることであった(図3)。

他方、韓国語談話では、場の意識は希薄であり、それと連動して対象をともに見るという談話構築態度も希薄であった。韓国語談話で重要なのは、話し手が聞き手を見ていることであった。また、親しい間柄であるウリ同士の会話では、話し手と聞き手の距離は、日本語談話より近く意識されていた。近い距離からさらに話し手が聞き手を巻き込んで距離を縮めることが重要だとされるのが、韓国語の談話構築態度の基本モデルであった⁸⁾(図4)。

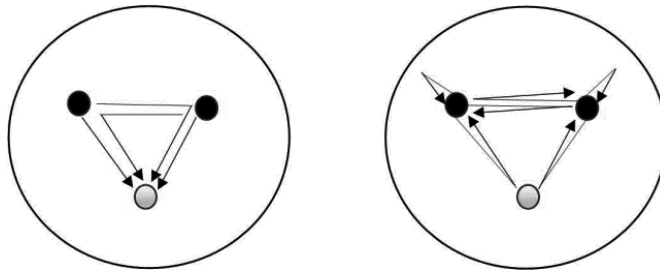


図3 日本語の談話構築態度（沖・姜2018より）

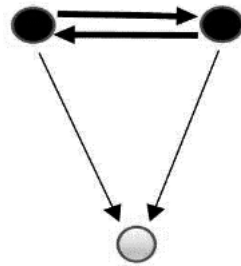


図4 韓国語の談話構築態度（沖・姜2018より）

6. 対照談話論からみた「かまぼこの新作？」

先に、図3、図4として示した、日韓の談話構築態度を、ここで改めて言語化すると次のようにまとめられる。沖・姜・趙（2019）より引用整理する。

日本語談話では、話し手と聞き手が離れて立ち（＝自他分別）、両者を取りまく場を意識している（＝場面意識）。話し手は、場、聞き手、もの（対象）を見るとともに、聞き手がものをどう見ているかも見ている。聞き手も、同様の見方をする（＝三項関係）。すなわち、話し手と聞き手が相互のものの見方を添わせ、場やものをともに見ている。こうして、イーミックな文レベルでの省略の多い主観的把握文で表現された談話であっても、聞き手は補完的に談話的意味を理解することができる。以上、日本語の談話構築態度の特徴は、自他分別、場面意識、三項関係によって説明される。

他方、韓国語談話では、話し手と聞き手は日本語談話と同様に離れて立つ（＝自他分別）。しかしながら、日本語談話より両者の距離は近い。また、話し手が場を見る意識は希薄で、もの（対象）を見るより相手を見ることに多くを費やし（＝自他向かい合い）、お互いが知り合うことに重点がおかれている（＝相手巻き込み）。そのため、親しい者同士の雑談では、話し手と聞き手がともにもの（対象）のみに目を向け、その話題に終始したまま談話が終わるということがない。もの（対象）は、相手と向き合うための導入とする以上の意味を認めにくいといえる。以上、韓国語の談話構築態度の特徴は、自他分別、自他向かい合い、相手巻き込みによって説明される。

さて、会話場面で、相手の手許のかまぼこを見ながら「かまぼこの新作？」と聞くのは、日本語では自然な発話の一つである。「かまぼこの新作？」をイーミックなレベルにおいて

復元すると「これは、かまぼこの新作か？」という可能性があり、「これは」という主題と「か」という終助詞が省略されている、と述べることもできるであろう。

しかしながら、エティックな談話レベルでこの発話を観察すると、「かまぼこの新作？」は、話し手が見えているままに発話した主観的把握文であり、この場面においては、「これ、かまぼこの新作？」「かまぼこの新作なの？」「かまぼこの新作か？」「かまぼこの新作じゃん」などいくつかの表現的可能性のなかから選択された談話表現とみることができる。日本語では、イーミックなレベルでは述語の省略された表現として定位されるが、エティックなレベルでは省略はなく、この場面の無標の表現として定位されるのである。

このとき、「かまぼこの新作？」という「NのN」だけを残してあとを表現しない名詞止がなぜ可能なのかといえ、日本語の談話構築態度がかかわっていると考えられる。すなわち、日本語談話では、話し手と聞き手が場面を意識し、お互いに相手が対象をみている見方をも視野に入れているからである（三項関係）。それによって、話し手がイーミックな文という観点からは省略の多い主観的把握文を使用しても、相手の対象に対する見方をなぞっている聞き手は、容易にその意味や意図を理解することができると考えられる。

それに対して、韓国語談話では、この場面では名詞止文は使用されず、述語を添えた表現が無標である。韓国語の談話構築態度を観察すると、聞き手は、対象をみる話し手の見方に添う態度は薄い。そのため、名詞のみを示しても、聞き手は話し手の意味や意図を巧みに復元することは困難である。そこで、話し手の感情・思想を描写する述語を添えて発話する必要があるのだと考えられる⁹⁾。韓国語談話で重要なのは、話し手が、聞き手を見て、相手を巻き込んだ談話展開をすることであり、場面意識は相対的に薄く、かつ、三項関係にはない。そのため、話し手の側のものである思想・感情を伝えるには、述語を言語化して伝えることが必要なのだと考えられるのである。

以上のような談話構築態度の差異があって、日韓の談話表現の異同が生まれてくることを述べた。談話産出は個人がおこなう言語選択の結果でもあるので、個人ごとにその巧拙があるのは当然である。しかしながら、本論でとりあげてきたように、エティックな談話使用において、それぞれの言語ごとの一般性がみられることに留意すれば、談話使用の基盤となる談話構築態度が存在することを認め、記述することの妥当性を明らかにしえたといえよう。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費基盤研究(C)19520389、24520498、15K02561、18K00609（研究代表者 沖裕子）、および、JSPS 科研費基盤研究(B)16H03413（研究代表者 生越直樹）の助成を受けている。2019年3月4日（月）に東京大学駒場キャンパスで開催された「科研費成果報告公開シンポジウム「日韓両語の「省略」は何を語るか—言語の個性性と普遍性に向けて」における招待発表「対照談話論からみた日韓の省略」の内容に加筆整理したものである。席上に有益なご助言を賜りましたことに感謝申し上げます。また、本論後半の内容は、共同研究者である韓国カトリック大学姜錫祐教授との議論に拠っていることを記し、この場を借りて深謝申し上げます。

【注】

1) 井出（2006）では、敬語のある日本語と、それがない英語では、ポライトネスの原理が異なる

- ことを主張した。また、井出（2016）では、「卵モデル」が提唱されている。2個の生卵を皿の上に割り入れると、二つの黄身は、一体になった白身のなかに浮かぶ。日本語は、話し手と聞き手が場を共有した談話展開をしていることをモデル化したものである。本論では、卵モデルでは説明できない部分があると考え、談話構築態度について言及する。
- 2) 『日本語学大辞典』（日本語学会編、2018年、東京堂出版）より。「省略」の項目は、井上優執筆。主節の省略、格成分の省略、並列文における省略、応答文における省略、主題の省略、「XはY」構文が紹介されている。
 - 3) この場合の解釈は、話し手と聞き手を切り離す exclusive の場合と、話し手と聞き手を同一の集団に含んだ inclusive の場合と、両方が可能である。話し手が産出した言語表現だけを見た場合には複数の意味が生じており、あいまいさ、あるいは両義性が認められる。場面を参照しないと一義には決定されないが、談話展開上、その意味解釈は聞き手に委ねられる。池上（2000、2007）が「聞き手責任言語」と呼び、沖（2013）が「指標型言語」と呼ぶのは、こうした日本語談話の性格が関係していると考えられる。
 - 4) 池上（2007）は、幸田文『流れる』の冒頭文「このうちに相違ないが、どこからはいいいか、勝手口がなかった。」を引用し、ドイツ語を母語とする日本文学専攻の博士課程大学院留学生や、アルゼンチンから来た作家ドメニコ・ラガナ氏が、まったく解釈できなかったことに触れている。
 - 5) 生越（2018）では、「きれいな花」のような「A+N」構文において、日本語では、AもNも新出であっても使用できるが、韓国語では話し手が示す新出成分がAかNのどちらかの場合しか使用できないという指摘をしている。こうしたことも、本論で後述する談話構築態度がかかわっていると考えられる。
 - 6) ただし、次のように、特殊な文脈で、驚きを伝える表出的発話としては産出されることがある。たとえば、コーヒーアレルギーで入院したことを知っている相手が、部屋に入っていったらコーヒーを飲んでいるのを見て、「커피?（コーヒー?）」と叫ぶような場面である。「コーヒーを飲んでいるの? コーヒーを飲んで、大丈夫なの?」という驚きをもって、思わず発するような場合は、名詞一語文でも自然である。しかし、それ以外の場合には、名詞止の「커피?（コーヒー?）」を用いることは不自然であり、何らかの述語がないと落ち着かない。
 - 7) 渡辺・鈴木（1981）は、韓国語では「梅の花の話題は、あくまで話の糸口にし、この梅の花を介して相手をひき込む方向に話をもっていくべき（173頁）」だと考えること、また、「相手への反応をはっきり示すと同時に、質問、冗談、ユーモアでもって、相手への働きかけを積極的に行う（175頁）」という意味で、「韓国人にとっての対話というものは、相互間の積極的なエンガジュマンを前提として成り立っている。（175頁）」という言語意識を述べている。梅の木談話の話題展開は、韓国人にはなじみにくく、この会話を会話として成立させている非言語的な気持の流れがつかみにくいことにも言及している。たとえば、「もう梅の花が咲いていますね。」「ええ、紅梅です。」では、「（眼の前の紅梅をみながら話をしているのだから、紅梅であることは分かりきっている。なぜ、わざわざあたりまえのことをいうのか理解できない）（173頁）」等々の韓国語母語話者の反応が記されている。
 - 8) 以上、図3、図4のような談話構築態度モデルを仮説することによって、「梅の木談話」の有無（以下の①）だけではなく、談話のA層、B層に関わる日韓差も説明可能なモデルであることを沖・姜（2018）では示した。たとえば、座を譲って人の序列に従う韓国と、決まった座を重視する日本との差異（②）。結婚式で、新郎新婦に個人的に挨拶をすれば飲食は個別にとる韓国と、場の出席者全員で新郎新婦を祝い飲食をともにする日本との差異（③）。「迷惑をかけあうのが友達」とする韓国に対して、「親しき仲にも礼儀あり」とする日本（④）、などを、事

象として挙げた。これら①から④の談話的異同は、談話構築態度の日韓差によって統一的に説明できることを、沖・姜 (2018) では述べた。

- 9) また、韓国語談話においては、A + N 構文は、A か N のどちらか一つが既出である必要がある (生越2018) ことも、こうしたことと関係しているであろう。A か N のどちらかが既出であることにより、既出であるほうが述語的に機能するからであろう。きれいなものが沢山ある部屋だという認識を共有している場合 (A が既出)、「きれいな本」は、「本がきれいだ」という解釈を許し、A が述語として機能するからであろう。また、本がたくさんある部屋だという認識を共有している場合 (N が既出)、「きれいな本」は、「きれいなのはこの本だ」という解釈を許し、述語が補われるからであろう。

【参考文献】

- 池上嘉彦 (2007) 『日本語と日本語論』 筑摩書房 [池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社 を改題]
- 井出祥子 (2006) 『わかまへの語用論』 大修館書店
- 井出祥子 (2016) 「グローバル社会へのウェルフェア・リングイスティックスとしての場の語用論—開放的語用論への挑戦—」『社会言語科学』 18—2 社会言語科学会
- 沖裕子 (1995) 「接続詞「しかし」の意味・用法」『日本語研究』 15 東京都立大学国語学研究室
- 沖裕子 (1998) 「チャレンジコーナー」『月刊言語』 27—9,10 大修館書店
- 沖裕子 (2006) 『日本語談話論』 和泉書院
- 沖裕子 (2010) 「依頼談話の結節法」『日本語学研究』 28 韓国日本語学会
- 沖裕子 (2013) 「談話種変換からみた日本語談話の特徴—わかまへ・察し・仕立て・見立て—」『明海日本語 第18号 増刊』 明海大学日本語学会
- 沖裕子・姜錫祐 (2018) 「日本語の談話構築態度—日韓相互の情緒的違和感を説明するモデル—」『日本語学研究』 55 韓国日本語学会
- 沖裕子・姜錫祐・趙華敏 (2019) 「日韓対照からみた日本語の談話構築態度—発想と表現の差を説明するモデルの検討—」『日本研究』 50 韓国中央大學校日本研究所
- 生越直樹 (2018) 「省略現象からみえてくること—「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語—」『社会言語科学会第42回大会発表論文集』 社会言語科学会
- 坂原茂 (1985) 『日常言語の推論』 東京大学出版会
- 定延利之 (2011) 「コミュニケーション研究からみた日本語の記述文法の未来」学会誌『日本語文法』 11—2 くろしお出版
- 定延利之 (2015) 「コミュニケーション原理—言語研究からの眺め—」『電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ Fundamentals Review』 8—4
- 趙華敏 (2016) 「主観性の相違による言語使用への影響について—中国人日本語学習者が使う日本語を例に—」小野正樹・李奇楠編『認知とポライトネスの接点』 くろしお出版
- 浜田寿美男 (1995) 『意味から言葉へ—物語の生まれるまえに—』 ミネルヴァ書房
- 渡辺吉籙・鈴木孝夫 (1981) 『朝鮮語のすすめ—日本語からの視点』 講談社

On Ellipsis in Japanese and Korean viewed through a Study of Contrastive Discourse

Hiroko Oki

Abstract

It is pointed out that an expression such as “Coffee?” is natural in Japanese but not so in Korean in a similar situation. This paper explains the reason why in Japanese a sentence can end with a noun whereas in Korean a predicate is required in a similar situation. The author proposes that ellipsis can be analyzed at both the emic level and the etic level. Emic-level ellipsis is explained at the abstract level and etic-level ellipsis at the concrete level. At the emic level, a sentence ending with a noun like “Coffee?” is classified as a sentence in which the predicate has been omitted. On the other hand, at the etic level of concrete discourse, this sentence would be classified as an appropriately unmarked expression with no omissions.

From the above argument, it can be assumed that the difference in acceptability of the expression “Coffee?” between Japanese and Korean is caused by the difference in the Discourse Construction Attitude. In Japanese, the speaker and the listener stand separated from one another; the speaker sees the object and, at the same time, the listener’s perception of that object. The listener, on the other hand, sees the speaker and the speaker’s perception of the object, a structural pattern known as the Ternary Relationship. Therefore, for the Japanese speaker and listener, it is relatively easy to reconstruct the meaning of the utterance if the sentences have omitted predicates. Conversely, in Korean Discourse Construction Attitude, the speaker and the listener are separated from one another; the speaker is less conscious of the object and the listener’s surroundings; the speaker and the listener see each other and the speaker focuses their attention on the listener in the conversation. Korean Discourse Construction Attitude has no Ternary Relationship. Therefore, it is hard to represent the speaker’s expressional meanings without predicate sentences.

Keywords: ellipsis, ending a sentence with a noun, Discourse Construction Attitude, contrastive discourse study, Japanese, Korean

(2019年4月30日受理, 5月21日掲載承認)